

# 反障害通信

24. 11. 3

160号

## 核というダモクレスの剣

フクシマ原発事故の後、「朝日新聞」で、ギリシャ神話をモチーフにした「プロメテウスの罫」という連載がありました。わたしはもうひとつのギリシャ神話を挙げることができます。それが「ダモクレスの剣」ということです。前回の巻頭言の註（註1）にも付けましたが、ウィキペディアの「ダモクリス」の項に絵画付きでかなり詳しい解説が載っているので、それを見てほしいのですが、一部引用しておきます。

「贅を尽くした饗宴の中、誰もが羨むと思われる玉座に腰掛けるよう当世の僭主（中央）から勧められたダモクレス（中央左寄り）は、細い糸で吊るされた剣が玉座の真上にあることに気付き、僭主の抱く恐れを理解する。」とあります。その後にもっと詳しい説明があります（註2）。

さて、不勉強なわたしは今回検索していてケネディ大統領が国連演説でこの逸話を引用しているのを初めて知りました。（註2）の最後に引用してあります。

この演説で、「老若男女あらゆる人が、核というダモクレスの剣の下で暮らしている。世にもか細い糸でつるされたその剣は、事故か誤算か狂気により、いつ切れても不思議はないのだ。」とあります。ここにも歴史的な「精神障害者」差別があります。わたしは、フクシマ事故が起きたときに、関西に住む母の介護が本格化し始めていて、大きく盛り上がった反原発・脱原発の運動に遅れて参加しました。母の介護をしながらフェイスブックで情報を集めながら、原発・環境問題などの本を読みあさっていました。そのときに情報発信続けていたひとに、東京から関西に避難した、「精神障害者」でフェイスブックで「友人」になったひとがいました。ケネディ大統領は「精神障害者」が核の加害者となる可能性を演説でしたが、「核というダモクレスの剣」を、最も敏感に感じ取り、被害者になるのは、「精神障害者」なのだと思います。そして、戦争犯罪と言われることを引き起こした政治家で「精神障害者」と規定されていたひとをわたしは知りません。むしろ、アーレントのアイヒマン分析に見られるように、「普通の人」が「戦争犯罪」という非常なことを引き起こしてきた歴史があり、反転のようなことが起きているのです。その反転という観点からとらえると、戦争に行った兵士でPTSDを「発症」する事態を見ると、「まともなひと」が発症していき、「発症しないひと」の方が「まともな感性がない」のではないかとさえ思えるのです。

今日、ロシア・ファシスト・プーチンが、ウクライナ戦争で核の使用を口にし、原発も攻撃対象になって、「核抑止論」など幻想にすぎないと消し飛び、そもそも「核脅威論」でしかないことが明らかになり、核がまさに地球に住むすべてのひとびとの「ダモクレスの剣」の剣になっているのです。

アメリカ大統領選でトランプ元大統領が、「自分が大統領だったら、ウクライナ戦争は起

きなかった」と発言し、「自分が大統領に返り咲いたら、一週間で戦争を止める」とか言っています。「嘘つきはファシストの始まり」という提言を想起もさせますが、「何をするか分からない」というところで脅威政治をしている、トランプ自体が「ダモクレスの剣」になっているのです。

この「ダモクレスの剣」の逸話は、政治の責任ということも想起させます。

フクシマ原発事故が起きて、原発震災といわれる事態で避難を強いられ、関連死したひとが二千人を超えています。二千人を超えるひとを死なせた責任は誰がどうとるのでしょう！ 小児甲状腺がんをはじめとする、がんを発症していくひとが、他地域よりも増えていくでしょう？ 政治だけでなく、企業の責任においても、誰も責任をとらないままです。

ダモクレスの剣の話に繋げると、政治の責任、公的企業の責任ということを考えたら、無責任がまかり通る政治を何とかしなくてはいけないのです。韓国では、前大統領が刑事責任を問われて刑務所に収監されていくという事態も起きていました。それが当然のことなのです。責任ということを見ると、政治家は責任という「ダモクレスの剣」を頭の上にかけて行動することなのです。それは軍事や原発だけでなく、自分たちの活動がもたらすことが民衆に大きな影響（原発や戦争ということでも端的に現れている）を考えると、自らの責任ということがあると、責任で身を震わすこと、まさに「ダモクレスの剣」なのです。ところが政治家も公的団体も公人もまさに真逆な状況なのです。どうしたら、政治家の頭の上に「責任」という「ダモクレスの剣」をつけることができるのでしょうか

(註)

## 1 ダモクレスの剣

栄華の中にも危険が迫っていること。シラクサの王ディオニシオスの廷臣ダモクレスが王位の幸福をほめそやしたところ、王が彼を天井から髪の毛 1 本で剣をつるした王座に座らせて、王者の身边には常に危険があることを悟らせたという故事による。（「デジタル大辞泉」）

2 **ダモクレスの剣** (ダモクレスのつるぎ<sup>[1][2]</sup>、一 のけん<sup>[3]</sup>。英語：sword of Damocles<sup>[4]</sup>, Sword of Damocles<sup>[4][3]</sup>) とは、栄華の最中にも**危険**が迫っていること<sup>[1]</sup>や、そのような危険<sup>[4]</sup>、または、常に身に迫る一触即発の危険な**状態**<sup>[3]</sup>をいう。

**歴史**のうえでは、**紀元前 4 世紀**初頭、**古代ギリシア文化圏**内にあったシケリア島（現・**シチリア島**）にて全島を支配下に収めて繁栄を謳歌する**植民都市**シュラクサイ（現・**シラクサ**）での話。その実、**ギリシア神話**に見られる話。

全シケリアを統べる**僭主ディオニュシオス 2 世**に臣下として仕える若きダモクレスは、ある日、僭主の**権力**と**栄光**を羨み、追従の言葉を述べた。すると後日、僭主は贅を尽くした**饗宴**にダモクレスを招待し、自身がいつも座っている**玉座**に腰掛けてみるよう勧めた。それを受けてダモクレスが玉座に座ってみたところ、ふと見上げた頭上に己を狙っているかのように吊るされている 1 本の**剣**のあることに気付く。剣は天井から今にも切れそうな頼りなく細い**糸**<sup>[1][5]</sup>で吊るされているばかりであった。ダモクレスは慌ててその場から逃げ出す<sup>[6]</sup>。僭主ディオニュシオス 2 世は、ダモクレスが羨む僭主という立場がいかにも命の危険を伴うものであるかをこのような**譬え**で示し、ダモクレスもまたこれを理解するのであ

った<sup>[7]</sup>。

統治者・支配者の幸福の危うさを悟らせる故事「ダモクレスの剣」は、古代から現代に至る長きにわたり、古代においては古代ギリシア・ローマ文化圏で、中世以降においてはヨーロッパ文化圏を中心とした世界で、成句として好んで用いられてきた<sup>[8]</sup>。後述するキケロの『トゥスクルム談義』は古代ギリシア・ローマ文化圏における代表的引用例、ケネディ大統領の国連演説はヨーロッパ文化圏における代表的引用例である。

### ケネディ大統領の国連演説

#### [編集]

この逸話が日本でよく知られるようになったのは、ケネディ大統領の国連演説 (1961年) である<sup>[8]</sup>。

地球のすべての住人は、いずれこの星が居住に適さなくなってしまう可能性に思いをはせるべきであろう。／老若男女あらゆる人が、核というダモクレスの剣の下で暮らしている。世にもか細い糸でつるされたその剣は、事故か誤算か狂気（ママ）により、いつ切れても不思議はないのだ。

演説と故事とは、完全な類比にはなっていないが、謂わんとするところは明快である。

(み)

(「反差別原論」への断章) (90) としても)

### HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 160号」アップ(24/11/3)
- ◆「反差別資料室C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年5月の末に1年余ぶりにリアップしました。
- ◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のHP」のIV．F[廣松ノート]  
<http://www.taica.info/hiromatunote.html>に『物象化論の構図』をアップしました。
- ◆「反差別資料室C」で、「B.「反差別原論」断章」に掲載していた原稿の内、反原発・反核問題に関説している論考を重複させて、「E.反原発・反核」にも掲載しました。最初の( )内数字が、「E.反原発・反核」の通し番号、次の(8)以降の( )内数字が、「B.「反差別原論」断章」の通し番号です。ちなみに、最後の数字は、所収している「反障害通信」の号数です。

### 読書メモ

[廣松ノート (7)] の『存在と意味』に入る前に、積ん読している本の読書メモ一挙掲載です。昨年七月に亡くなった立岩さん関係が2回分(雑誌二冊と本一冊)。沖縄の三上さんの本。山本義隆さんの原発関係の本。追っかけている斎藤幸平さんの本二冊。

・『現代思想 2023年9月号 追悼●立岩真也』青土社 2023

・『現代思想 2024年3月臨時増刊号 総特集 立岩真也』青土社 2024

前者は、死後直後のこの雑誌——立岩さんが連載原稿を書いていた雑誌の最初の発刊に載せられた、三本の追悼文。

後者は臨時増刊として出された彼と関わりのあった諸々のひとたちの追悼文になっています。

前者の追悼文、後者の総特集を読んでいて、改めて、すごいネットワーク・人脈を築き上げていて、しかも、障害学から生存学と拡げ、しかも、それが根を張るように拡がっている、勿論、総てのことが判るわけではないということは押さえつつ、それでも関心を繋げていっている、そこで、自らが「指導する」ひとたちをその生活の成り立ちということも配意しつつ育て、学だけではなく（「生存学」ということではつながるのかもしれませんが）、移住空間や農・食べもの、その他諸々、触覚が伸びるように関心事が拡がり伸びていっていたのだと、その広がりや深さに驚愕せざるをえないのです。そして何人かのひとが書いているように「生き急いで」逝ってしまったのだと想っています。

わたしとしては、この文を掲載している「反障害通信」の136号に追悼文を書いています。<http://www.taica.info/adsnews-136.pdf>

わたしは障害学批判をやっているのですが、そこで、主の接点が、立岩さんだったので、その接点を喪失して、他にも何人かの喪失を経験しつつ、立岩さんとは逆にますます「たこつぼ化」していくことにおそれおののいています。

さて、もう幾つかの立岩さん自身との対話文は書いています。今回、『私的所有論』を引っ張り出して、そこにはかなりの書き込みをしているのを見出し、本やHPに載せた、立岩さんへの手紙風の対話文が、要点だけをまとめたものになっていて、改めて逐一の対話文を起こしたいと思いが湧いてきたのですが、届かない文を書いていっても、余り意味がないし、立岩さんとの宿題も含めて、宿題をいくつも抱えているので、そちらでの対話を進めます。

ここでは、多くのひとの追悼文を読んでいて、立岩さんとの対話の核心点だけを改めて確認する作業に止めます。

まず、第一の「文体」の話。多くのひとが立岩さんの独特の文体をとりあげています。小川さやかさんの文に「立岩さんの文章の特徴は、このような弁証法的思考の過程を開示することで、……」140Pとあります。まさにその自問自答風の「対話」としての弁証法的手法なのです。このことを理解すると、立岩さんの文の進め方が判るし、さらには、その弁証法というところから、ヘーゲル／マルクス／廣松弁証法（註1）から弁証法をおさえ直す作業の中で、立岩さんの文の弁証法途行きをとらえかえすことが出来ます。たとえば、①立岩さんはこの社会の通念になっていること、多くのひとが囚われている常識のようなこと（註2）、に対して、②「果たしてそうだろうか、別の考え方ができるのではないかと、別の考え方を示してみます（註3）。③そして、①と②の対話を進行させ、②の自分の提起したことの論的深化を導き出します。それが「良い」とか、「可能だ」とか、……とまとめます（註4）。たしかに、③の①に対抗する立岩さんの最終的にまとめ

た考えがみんなに滲透していけば可能なのです。ですが、そもそも、①の考え方は資本主義体制からこそで、みんながその体制にのっとって生きている中で、身に付けている意識です。②の意識はその体制に反する意識です。例をあげます。ベーシックインカム論があります。この総特集の中でも山森さんが文を書いています。「基本所得保障」とか訳されています。そもそも、「基本所得保障」をどう定義するかの問題があります。ネグリ／ハートが『<帝国>』の中で、「国境を越えた、ベーシックインカム」という提起をしています。ネグリはイタリアの共産主義志向の運動で伝統的な構造改革革命論として、これを出しています。一方で、今日本でベーシックインカムを突きだしているひとが居ます。それは竹中平蔵新自由主義者のベーシックインカム論で、これは福祉の切り捨て、軽減のための「自己決定の論理」をベースにしている、こんなものを導入することは、基本所得保障で生活できない者は死ねということになります。実は、「障害者運動」サイドからすると、求めることは「基本所得保障」ではなくて、介助なり医療なりを含めた生きるための「基本生活保障」なのです。現在、そもそも「生活保護」でもそもそもいくつもの加算がなされます。ただし、どこの国でも、調査とかなしの、またスティグマを貼らない生活保障の支給はなされていません。それがなされたら資本主義は崩壊します。資本主義が資本主義であるかぎりそれか不可能です。ですから、逆に言えば、ネグリ／ハートがなし崩しの革命論として、もしくはせめぎ合いのツールとしてベーシックインカムを突きだしたのです。ですから、①に対抗する②③の意識にするために体制の変革が必要だという話になっていくし、そのひとつの方法論としてネグリ／ハートのベーシックインカムもあったのです。この場合の「基本生活保障」が③になります。

第二に、そもそも、立岩さんは『私的所有論』で、「……………。結局いろいろやってみてわかったように「市場経済」で行くしかないのだし、行くのがよいのだし、そこにまずいところがあればところがあれば、「福祉国家」か何か、手を打てばよろしい、このように終わる……………」4P「局所に望ましい関係を作っていくことが問題を解決しないのであれば、全域が一気に変わらなければならない。しかし、現在の関係が現在の私達を作っている限り、待っていては変わらない。とすれば事態を見抜いた者達、少数者達が先駆的にいまあるものを全面的に覆してしまい、関係を変えてしまえば、その後、関係が存在（意識）を規定するのだから、事態はうまく運ぶだろう。その他の人々の意識も変わる。だからまず少数者が、多数の承認をえられないとしても、関係を変えるしかない。このような主張が、論理必然的に、導かれる（廣松渉[1975][1981]等）。だがそれにしても革命は容易ではない。」296P（註5）

前の引用文と後の引用文は少しニュアンスが違います。前者は、この著作、そして全著作を貫いて、市場経済を前提にして話を進めるという態度とつながっています。後者は、そもそも、「マルクス・レーニン主義」というマルクス派の主流の考えですが、これこそが批判・止揚の対象となっているのだとわたしは押さえています。実は、立岩さんと対話に踏み込んだのは、わたしが認識論的に影響を受けた廣松さんの著作を文献表にのせていたこともあったからです。ここの文献に挙げているのは『新左翼運動の射程』と『現代革命論の模索』ですが、わたしもこの二冊は読んでいて、廣松さんも「マルクス・レーニン主義」にとらわれていると感じていました。そもそも他のもっと、廣松理論の展開と言われ

る文が文献として挙がっていないことと、文献や本文中にマルクスの名が挙がっていないことにわたしは疑問を持ちました。サルトルやデリダが、「現代社会で乗り越え不可能な思想」とマルクスを評価したように、マルクスをスポイルすると、現代社会——資本主義差社会の分析さえままならなくなります。わたしは、「廣松ノート」を今書いているので、廣松さんのマルクス・レーニン主義（ポリシェヴィキズム）への陥穽はあるのか、ここまでは押さえる作業をしたいと思っています（註6）。

実は、最初の追悼文を載せた号で、追悼文を書いた小松さんが、自分の指向性の「卓袱台返し」に対して立岩さんの論攷は「改良主義」になっていると批判をしています。確かに、そうですが、そもそも立岩さんは「市場原理」を否定しないところで論をすすめているのですが、現実には、「関係が存在（意識）を規定する」という『私的所有論』の296Pの文、実はマルクスの唯物史観の定式に廣松理論を織り込んだような定式を示していることからして、わたしは立岩さんが自らの論攷を、「それは市場経済の論理を踏み外した議論になってしまっている」という弁証法的な自らの提起を次々に繰り出していること自体のとらえ返しと、次なるステップに入り込んでいくことではないかと想います。いっそのこと前提をとっぱらったところで展開していく論をわたしは期待してしまうのですが。

第三に、立岩さんは社会学者なのですが、社会に倫理を打ち立てるといふ倫理主義的社会学という道に踏み入っているのではないかとわたしはとらえています。「関係が存在（意識）を規定する」といふ唯物史観の定式からすると、「倫理主義的社会学」とはありえるのでしょうか？ 数々のマルクス主義（註7）を冠した学の体系があるのですが、「マルクス主義倫理学」といふことはありえないのではないのでしょうか？ 立岩さんの文が判りづらいというのは社会学的論を展開しているときに、善悪論的な「よい」とかいう倫理的用語がでてくることのあることで、もやもやとした思いに陥ることがあるからかもしれません。立岩さんが学生時代に寮自治会とか学生自治会に参画し、その中で裏切られたとかいう思いを抱いたとかいう話が総特集の文の中何人かのひとから出てきます。社会変革的活動の展望がとらえられなくなったという中で、マルクス葬送の流れの中で（註8）、しかも、学者受難の時代に倫理主義的なところの学へ入り込んでいったのではないかと思ったりしています。「改良主義」かどうかは別にして、社会変革的な志向がなくなっているわけではなく、「生き急ぐ」というとらえ方がされるほど、情熱と思いを持ち続けていたひと、どちらにしても、「障害者」、被差別者のおかれている状況を問題にし、「よりよい方向へ変えていく」というところで果たしてきた活動を、その批判も含めての活動を進めていくことが、彼の追悼なのだと思っています。わたしとしては、彼との対話のなかで、提起された宿題をきちんと果たしていきたいと思っています。それで対話が当人と果たせないのは残念ですが、その思いを自らなりに引き継ぐ人たちとの対話がなしえればとも願っています。

（註）

1 廣松渉『弁証法の論理 弁証法における体系構成法』青土社 1980 で、ヘーゲルからマルクスを経た、かなり独自性をもった「廣松弁証法」と言い得るような内容を展開しています。なお、後の『私的所有論』296Pの引用文にも名が出て来て、その本の文献表の中に名が出ています。

2 「廣松弁証法」的なとらえかたをすれば、その社会の一般的常識的な（共同主観的な

客観的妥当性)の当事意識。

3 これも、「廣松弁証法」的などらえかたをすれば、「一般的常識的な意識に反定立する新しい提起」。

4 同様に、「当事意識」と新しい意識との対話の中で、止揚された「学的意識」。なお、ここで、「良い」とかいう立岩さんの突き出しは、後に書く、倫理主義的などらえ方になっています。

5 レーニン、ロシア社会民主(労働)党の党建設の当初から、中央集権的運動論・組織論や外部注入論を採っていました。立岩さんがここで書いているのは「ロシア革命」の手法ですが、その「革命」の最中に、アメリカの社会主義的ジャーナリスのジョン・リードからインタビューを受けて、「民主的な方法を執っていたら、革命するのに百年かかる」とか答えています。レーニンの運動論・組織論に対する批判を何人かのひとが批判していました。後に「日和見主義」とか「修正主義」とか批判されるひとを除けば、ローザ・ルクセンブルクとトロツキーが有名です。トロツキーは、「ミイラ取りがミイラになった」し、ローザも死の直前にゆらぎを見せていたようです。そもそも、ロシア革命が「社会主義社会」を定立したといえるのか、わたしは批判的です。労農独裁としてのソヴィエト独裁までは行ったけれど、社会主義の定立に失敗し、一党独裁の「国家資本主義」体制になってしまった。「百年かかる」どころか、共産主義志向の運動の桎梏になってしまった。と、いう押さえ方をわたしはしています。

6 立岩さんがここで書いていることは、廣松さんからの引用としていますが、まさにレーニン主義的革命論です。廣松さんはレーニンの哲学は否定的批判をしています、もう一度この二書をちゃんと読もうと思っています。

7 これまでも何回も書いているのですが、反差別論をやっているわたしは、個人崇拜的権威主義や、教条主義批判をしているので、「〇〇主義」ということばは「教条主義」化された意識への否定的批判のニュアンスでしか使いません。

8 反差別論を押さえようとしている立場からとらえると、マルクスの思想を通低音的に押さえないと、現在社会の分析が「社会変革」的などころで、できなくなるのです。わたしは反差別論をやっているのでフェミニズムの論稿を当然押さえる作業をしているのですが、マルクスの思想がはいっていないひと、マルクスを棄てたひとの論理が破綻していくのをとらえ返しています。そもそも、マルクス派のひとたちが差別の問題をきちんととらえ返せず、第二次フェミニズムが「(新)左翼への絶望から始まった」といわれるようなことがあり、民族差別その他、政治利用主義的に繰り返し陥っていくことがあったわけで、このことの総括からきちんと反差別ということを基底に据えた社会変革運動を展開していく必要があるのだと押さええています。「社会変革への途」を中断しているのをあらたにリニューアルしつつ、再開しようと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 673

・三上智恵『戦雲(いくさふむ) 要塞化する沖縄、島々の記録』集英社(集英社新書)

2024

三上智恵さんは映画監督でジャーナリスト。というより、沖縄の反基地運動をしているひとたちと共に闘い、共に涙し、共に喜ぶ、運動参画型ジャーナリストです。劇場映画はこの映画で5作目。元々はインターネットのサイト「マガジン9」に「三上智恵の沖縄撮影日記（辺野古・高江）」として映像と文を載せていて、定期的にそれを映画にして、また同時に文を編集して本にする形で発信を続けています。今回は、コロナ禍ということもあったのですが、間が空いていました。沖縄の運動が、「本土」政府の司法と一体化した、民意を反映しない基地建設・拡張、南西諸島のミサイル配備の中で、ジャーナリストとして伝え切れていないことと、運動の敗北感にさいなまれ、映画にまとめられなかったこともあったようです。そういう中で、映画を待ち望むひとたちから、マガジン9に載せている映像の上映会をしたいとの申し出があり、スピンオフ集会として無料で上映するということから始まり、映画製作に入っていったようです。涙を流しながら運動をしているひとたちに共感しながら自らも涙し、時にはカメラのスイッチを切ってしまうとか、敗北していく運動を撮ってどういう意味があるのか、とか、色んな思いの中での撮影と編集だったことが伝わってきます。「今回は闘争一辺倒でなく明るい映画にしました」とかいう話があったのですが、運動の思いがあるひとには、映像を観ているひとも、本を読む者も涙が止まらないのです。

今、南西諸島の敵基地攻撃能力ということも含んだミサイル配備が全国的に問題になっていますが、三上さんは、政府が当初のレーダー設置とか監視部隊の設置とか誤魔化しながら、基地を作り始めた当初から、沖縄本島のひとは米軍の基地の反対運動に立ち上がっているのに、どうして南西諸島の自衛隊配備に反対しないのかと、現地の反対運動をとりあげ、これは大変な問題だと警鐘を鳴らし続けていたのです。

この本には、三上さんの沖縄に関わる出発点的なことが、「27 70 回目の「屈辱の日」@ 辺戸岬」の章に、三上さんが小学生の時に「家族旅行」で沖縄を訪れ、国頭村北端の岬の「祖国復帰闘争碑」の碑文の「記念碑」や「祝い碑」でなく、なぜ「闘争碑」なのかという思いを抱き、そのことを解いていく過程として、沖縄の大学で民俗学を学び、沖縄のテレビ局のアナウンサー兼プロデューサーになり、運動に参画するような映画監督・ジャーナリストになっていったという経過が書かれています。そして、沖縄に対する強い、強い思いが全編に基底通音的に流れています。これほど、外から来て、深く共鳴し関わる稀有のひとの出発点のはなしです。

今、世界的にも、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザへのジェノサイド的侵攻とどうしてこんなことが起こせるのかというような戦争の渦の中にあります。核の抑止力など虚構に過ぎず、過去の歴史をとらえ返すと、軍備拡張は戦争の抑止などには繋がらないのに、なぜ、軍拡に走るのか、どうしても理解出来ないことが起き、そもそも政治総体で「論外」としかいいようなことが起きています。

三上さんの映像と文に共鳴する表紙と裏表紙に山内若菜さんの素敵な絵が載せてあります。三上さんの文は素敵な文で、切り抜きメモをいくつも残したいのですが、本を読んでほしいので、禁欲します。最後の文だけ引用しておきます。

「泣いても笑ってもダメなら、歌うしかない。最後は歌なんだ！ 祈りなんだ！ と知る。戦雲を吹き飛ばすまで、歌と祈りを止めない人たちにもっともっと出会いたいから、相変

わらず肝は据わっていないけれど、やっぱり私はこの仕事を続けていきたい。」 317P

映画を観ていないひとは、是非劇場で映画を、そして、この本も是非読んで下さい。わたしも沖縄に行けていません。せめて、映画を観て、本を読み、それを広げていくという形で運動に参画したいと念っています。

尚、この本の各章にはQRコードがついていて、スマホなどで「マガジン9」に載せていた映像が観れます。冒頭の章の、石垣島の山里節子さんのウタ(「反戦トゥバリャーマ「いくさふむ」)が心に響きます。映画と本の題名は、このウタの歌詞から来ています。

「マガジン9」 [三上智恵 | 検索結果: | マガジン 9 \(maga9.jp\)](#) でも、映像が観れるし、元文が読めます。

たわしの読書メモ・・ブログ 674

## ・山本義隆『核燃サイクルという迷宮 核ナショナリズムがもたらしたもの』みすず書房 2024

山本義隆さんはわたしたちの世代では知らないひとはいない有名人ですが、物理学者としても将来を嘱望されていたひとです。この本では、予備校勤務・科学史家として紹介されています。わたしの読書メモでは、原発関係のもう一冊の読書メモがあります(註1)が、もうひとつ[廣松ノート]で、廣松さんがカッシーラーの「函数的連関態」の概念を引用しているところで、それがまだ製本されていない山本さん訳本の原稿を引用させて貰ったというところで繋がっています。(註2)

今まで、原発関係の本やパンフレットの類いもかなり出ていて、わたしもそれなりに読んでいたのですが、この本は核燃サイクルに焦点を当てています。わたしとしては、今までの知識を整理し、肉付けしていくこととして読んでいました。この本は、原発の問題で政治との関係として貴重な本です。特に、ナショナリズム——ファシズムというところから、原発のとりわけ核燃サイクルをとらえ返しています。

さて、今回は切り抜きメモでなくて、山本さんの原稿に肉付けして復習的な文を遺します。

そもそも核発電は核兵器開発の副産物としてできた技術で、沸騰水型原発でいえば、なぜお湯を沸かすのに制御のむずかしい、また大量の核廃棄物が出てくる、しかもその処理方法もままならぬ核発電など作るのか、使い続けるのかという問いが立てられます。結局原点の核兵器の保持・潜在的保持能力を持つということが動因としてあり、それだけでもなく、それを持つことが技術先進国のステイタスを得られるという構図なのです。

日本の場合、アメリカのダブルスタンダードにつけ込み、中曽根首相の時、レーガン大統領との交渉で右派同士の共鳴のなかで、核爆弾の材料となるプルトニウムの精製を核燃サイクルの開発ということで、再処理技術の開発を認めさせ、原発をもつこと自体が、原爆所有に準じる準原爆所有国としての原発の維持・再稼働が成り立っているのです。岸元首相から石破元自民党幹事長まで、原発を動かすことと、人工衛星を打ち上げることで、核弾道ミサイルをいつでもつくれる状態にしておく(註3)、ということとずっと原発を作り維持していく理由の一つになっていて、それが事故を起こしても(註4)、原発を止めら

れない理由の一つになっているのです。更に、核爆弾を作るのに、その材料のプルトニウムを保持しておくためには、核燃サイクルの再処理ということが必要で、技術的困難とコストということで合わないとして核保有国が撤退していく中で、日本は、資源小国の立場という立場もあるのですが、これは自然エネルギーへの転換ということで、そもそも日本がかつて最先端の位置に居たのに、原発にこだわって、その技術開発を抑え込み、未だにその電力を二次的なこととして位置づけています。著者のいうテクノファシズム的なことで、もはや技術後進国になっていくなかでその「威信」(註5)をかけて一発逆転を狙って再処理技術にこだわり続けています。そもそもコストは合わないし、汚染水の排出などの環境負荷、危険性の増大などがあるにも関わらず、再処理に可能性があるとしないと、原爆の材料になるプルトニウムを多くもっているということで批判をうけることを回避するという意図が働いているようです。更に、そもそも廃棄物の処理方法も確定しないで原発を作り、運転使用済み核燃料がどんどん増えていく中で、テクノファシズムともいえるべき技術の優位性を示そうというファシズム的な心性に囚われているのです。破綻ははっきりしているのに、無責任の極みとして、ひとの命や生活が脅かされる、実際多くの死者を出しているのにやめようとしめない体制はまさに著者のいう「原発ファシズム」なのです。

さて、わたしはファシズム論で論考を進めようとしています。で、ハナ・アーレントのファシズムとして論じられていくことを「全体主義」としてまとめていく手法のなかで、今ひとつしっくり来ないことがありました。アーレントには日本型ファシズムへの論及はありませんし、ナチズム、ムッソリーニのファシスト党のファシズム、そしてロシアの全体主義—ファシズムの関係をまとめ切れていません。この山本さんの本の中で、日本型ファシズムの動きとして戦前・戦中の電力の国営民有という「中央集権的国家主義」の動向が出てきます。それが戦後になっても、国策によるいろいろな補助金、電気料金への転化をゆるすなど、国策・民営的な電力会社の寡占で原発推進体制を進めてきたのです。

そもそも、ロシアにおいて、どうしてアーレントのいう「全体主義」に陥ったのかというと、そもそもレーニンの運動論組織論の中央集権主義があったといわざるを得ません。今、電力だけでなく、地産地消ということが突き出され、地方自治ということの中に、民主主義の新しい展開構造が練られてきています。

この本の中で、戦前・戦中の革新官僚と軍部の結びつきから日本型ファシズムの隆起が押さえられています。このことがロシア国家資本主義の専制国家でのノーメンクラトゥーラとしてきされることとつながっていきます。テクノは自然科学技術だけではないのです。

今日、プーチンファシズムとも言い得る、ロシアの専制国家体制でのウクライナ侵攻、ネタニエフのパレスチナへのジェノザイド的攻撃が起きていますが、そもそもファシズム論が整理されていないので、プーチンファシズム規定やネタニエフファシズムという規定ができない、拡がらないでいます。このあたりの早急な論的整理が必要です。

山本さんのこの著は、その論的整理に貴重な資料です。

後、この本の中でフクシマ事故は不運な重なり合いの中で大きな事故になったのだという意見があるのですが、むしろ燃料プールにあるはずのない水が合って、それが燃料プールに流れ込んだから、東日本全滅という事態にいたらなかったのではないかという最近出て来た情報、青木さんの本(註6)にも書かれていたことが書かれています。核抑止論な

り、軍備拡張が戦争の抑止力となるというようなことが、そもそも過去の歴史の検証をしないひと、学ばないひとから出てくるのですが、改めて、核廃絶と軍備縮小の方向に進むことが今、必要になっているのだと思います。

汚染水問題とか閾値のこととか、グリーンフォッシュとかいう新しい概念がでてきていること、いろいろと対話的に書き置きたいことがあるし、ファシズム論の整理もしたいところですが、とりあえず、この本の大切さを押さえたところで、この読書メモは終わります。わたしがこの本をきちんと紹介し切れていないので、最後に目次をあげておきます。この本には索引がついているので、資料としていろいろ使えます。

## 目次

### 凡例

#### 用語について

いくつかの箴言——序文にかえて

### 序章 本書の概略と問題の提起

- ・一 核発電の根本問題
- ・二 核のゴミとその後処理
- ・三 高速増殖炉について
- ・四 核燃料サイクルの現状
- ・五 核ナショナリズム

### 第一章 近代日本の科学技術と軍事

- 一・一 日本ナショナリズムの誕生
- 一・二 資源小国という強迫観念
- 一・三 国家総動員とファシズム
- 一・四 革新官僚と戦時統制経済
- 一・五 戦時下での電力国家管理

### 第二章 戦後日本の原子力開発

- 二・一 核技術とナショナリズム
- 二・二 日本核開発の体制と目標
- 二・三 原子カムラと原発ファシズム
- 二・四 岸信介の潜在的核武装論
- 二・五 中国の核実験をめぐる
- 二・六 核不拡散条約をめぐる

### 第三章 停滞期そして事故の後

- 三・一 高度成長後の原発産業
- 三・二 原発推進サイドの巻き返し
- 三・三 核発電と国家安全保障
- 三・四 原発輸出をめぐる問題
- 三・五 原発輸出がもたらすもの
- 三・六 世界の趨勢と岸田政権

## 第四章 核燃サイクルをめぐって

四・一 再処理にまつわる問題

四・二 再処理のもつ政治的意味

四・三 高速増殖炉をめぐる神話

四・四 核燃料サイクルという虚構

## 終章 核のゴミ、そして日本の核武装

あとがきにかえて

参考文献

人名牽引

事項牽引

### (註)

1 たわしの読書メモ・・ブログ 595 / ・山本義隆『福島原発事故をめぐって—— いくつか学び考えたこと』みすず書房 2011

2 たわしの読書メモ・・ブログ 656 [廣松ノート (5)] / ・廣松渉『弁証法の論理 弁証法における体系構成法』青土社 1980 (3)

3 北朝鮮が「人工衛星打ち上げ予告」をしての発射時に、Jアラートを鳴らすということをするなら、自分たちは人工衛星を打ち上げするのを止めることです。

4 事故は数々起きていて、著者はその一覧表を載せています。そもそも、スリーマイル、チェルノブイリと大事故が起きたのに、その時点で縮小廃止しないことがフクシマにつながったのです。

5 「威信」とか「権威」ということも差別的なことへのとらわれで、ファシズム的なこととして押さえることができます。

6 「たわしの読書メモ・・ブログ 657 / ・青木美希『なぜ日本は原発を止められないのか?』文藝春秋 2023」参照。

たわしの読書メモ・・ブログ 675

・斎藤幸平・松本卓也編著『コモンの「自治」論』集英社 2023

追っかけをしている斎藤幸平さんの編著です。わたしは「社会変革への途」を書き始め中断しているのですが、その問題意識と、斎藤さんのこの編著での展開が、かなり重なるところがあるように感じています(註1)。

さて、かなり詳しい目次が出ていて、それをざっと見ているだけでも、かなり内容がつかめますので、最後に目次を挙げますので、ざっと七章分の概略を押さえます。わたしの当事者性や、個的経験的なこともあるのでかなり濃淡のあるとらえ返しになっています。

第一章の白井さんの「全共闘運動——前衛と大衆の乖離から政治嫌悪へ」の項があるのですが、むしろ、白井さんが全共闘運動自体を体現していたのは、ノンセクト・ラジカルであったという押さえをしているし、そもそも大学ごとに色んな全共闘運動といわれることがあり、いくつものパターンを示し得ます(註2)。また、全共闘運動は、「自己否定」の

論理だけでなく、色んなテーゼを突きだしていました。ポツダム自治会批判をしていましたし、戦後民主主義批判も突きだしていて、「誰も代表しない、代表させない」というスローガンさえありました。ところで、白井さんは、自己否定の論理が連合赤軍の「総括」を引き起こしたというようにとらえ方もしているのですが、そもそもマルクス・レーニン主義の党派が、レーニンの外部注入論からして、自己否定の論理など持ち出すわけがないのです。一部マルクス・レーニン主義の党派が、民族問題で「血債の思想」など突きだしたのですが、レーニンの民族自決権のまやかしと同様に、差別問題の政治利用主義的なところの畏から脱してはいません。連赤の「総括」ということの内容は、「自己批判要求」などということで、そもそも自己批判というのは、自ら進んで自己批判する、総括することで、「総括」を要求するとして行われていたこと自体が論理矛盾なのです。あれは、指導者とされていたひとたちが、組織を守るという名目で、自らの組織内権力を守るための、追いつめられた状況下で猜疑心にかられた、粛清といわれることなのです。その展開は全共闘運動と言われていたことの真逆なこととしてあったのです。そもそも全共闘運動自体は「大衆運動」(註3)で、そのことと党派の運動は区別しなければいけないし、そもそも前衛——大衆運動という図式自体がとらえ返さるべきこととしてあると思います。白井さんの押さえは、民青——日本共産党の位置づけも含めて自分のいた大学のパターンを一般化しすぎているとわたしはとらえています。

第二章の松村さんの「贈与論」、ムースの贈与論へのとらえ返しから、「贈与」という概念は「無償の提供」という内容があるけれど、私有財産制が発生・支配しているところにおいては、見返りを求めている行為になっている、ということで押さえられているのではと思います。

「すきま」という概念が、この章のさらには、例外があるにせよ、この本総体を通してのキー概念になっているようです。わたしは、マルクスの「ザスーリッチへの手紙」で展開されていたロシアの共同体評価や沖縄の地域共同体で子育てをするなどの伝統的な、ひとびとの結びつきにも繋がっていきます。しかし、新自由主義的グローバリゼーションということが「すきま」を潰していくこととあるわけで、「店」がシャッター街として潰されていく構図があり、だから、むしろそれをアントレプレナーシップ(「起業家精神」として逆に反転的に、展開していく道筋探しのようなことも語られているのがこの章だと言えます。

第三章は、杉並区長になった岸本さんがミニユシパリズム(地方自治から攻め上がる)その後の展開を書いています。フェミニズム的な展開と合わせて、「民主主義を耕す」、貴重な実践です。ただ、政府もそのことを恐れて地方自治を潰す動きに出ています。むしろ、争点をはっきりしてきて、中央に攻め上がる運動につなげていける可能性を秘めているのではと思えます。

第四章は、新自由主義と科学主義批判の、市民科学的な動き、この章でも出てくる高木仁三郎さんのことが想起されます。オーラルヒストリーやナラティブということの大切さも突き出されています。

第五章は、反精神医学という突き出しがなされたことへの精神医療サイドからのとらえ返しです。わたしは「障害者」の立場からこの問題をとらえかえしてきました。病と障害

の関係、障害の医学モデルと「社会モデル」のせめぎ合い、そのことの止揚としての障害の関係モデルというところで、わたしは「障害の否定性」の否定」というところを展開している。反精神医学の中に「障害の否定性」の否定」という突き出しがあることには共鳴することがあるのですが、精神医療自体を全否定できないところで、反精神医学は反精神医療にはならないという押さえには同調するのです。また「べてるの家」の本はわたしも読み読書メモを残していますし、反転させてみせたというところには一定共鳴もするのですが、そもそも「精神障害者」が置かれている、苛酷な被差別の状況をどうするのかという問題をスポイルしてはならないという提起の内容で、「精神障害者」当事者から反発も出ていますので、このことの押さえが必要です。これは別の章を立てるとか、もう何冊か本を出すという形での、他の障害問題や他の被差別の問題での押さえが必要になります。

第六章は、食と農は、社会を変えていくことの基底に据えることですが、ここでは、権藤成卿というひとに留目しています。アナキズムとファシズムの間での揺れということなのでしょうが、わたしは左派と右派ということの押さえの問題として読んでいました。トランプ的右派ポピュリズム批判はかなり押さえられています、左派ポピュリズムという言葉も出ています。ですが、わたしは、左派というのは現在社会の矛盾をきちんととらえ返しそのことの根底的批判から社会を根底的に変えていくのが左派であり、左派ポピュリズムというと、それは日和見主義や修正主義と言われることで、左派から脱落したひとびとで、左派でないから、左派ポピュリズムなど存在しないのです。ただ、「右も左もない」とか「右でも左でもない」とか言って活動している「革新」風の「左派ポピュリズム」的な活動をしているひとが実際にいるのですが、そういうひとやグループは何をしようとしているのか分からないというところで早晩消えるか、ファシズム的なところに飲み込まれるか、むしろファシスト的に登場してくることになります。戦前の「革新官僚」が軍部ファシストとつながった例などにそれはあきらかです。

第七章は、この章がまとめた文で対話を深めたいのですが、斎藤幸平さんは追っかけていて、別のところでいろいろ書いているし、書いていくので、ここでは簡単に触れておきます。斎藤さんが各章とリンクさせた、総体的「自治論」の展開、共同主体的存在構造の中で、他律——自律の、二項対立的ではない、弁証法的な運動が展開されていくことです。わたしとしては、これは反差別ということを基底に据えた共同性や「自治」ということで、「誰も代表しない、させない」ということを据えつつ、それでも自然発生的なリーダーシップは起きてくる、そういうところで「リーダーフル」な運動となっていく可能性をもっているのではないかと考えたりしています。わたしは反差別というところから論を展開しているところで、そういった面での展開も押さえてもらえたらと、いつものないものねだりです。

前書き、あとがき、コラム的な文も刺激的だったのですが、長くなるので、ここでは省きます。

最初に予告したように目次をあげておきます。

## 目次

はじめに——今、なぜ<コモン>の「自治」なのか？ 斎藤幸平

## 第一章 大学に於ける「自治」の危機 白井聡

新自由主義が損なう「自治」の能力／資本のための大学でいいのか／若者の成熟を阻害する社会／新自由主義が奪う成熟、そして「魂の包摂」／「六八年」以降の反革命／全共闘運動——前衛と大衆の乖離から政治嫌悪へ／日大紛争——温存された腐敗の構造／大学当局が恐れた共産党の伸長／大学紛争のトラウマとカルトを使った「正常化」／空間の新自由主義的再編／孤立させ、管理せよ／「自治」を奪う大人たちの責任／「自治」の実質を取り戻す

## 第二章 資本主義で「自治」は可能か？ 松村圭一郎

——店がともに生きる拠点になる

「自由」や「自治」は歓迎されなくなった？／貨幣経済の滲透で薄くなる人格的なつながり／マルクスの商品交換論／古典的な文化人類学における「贈与」と「商品」／商品交換と贈与は二分できない／商品交換の場である「店」の現実／居場所としての「店」／市場原理と贈与交換のプリコラージュ／ボードリヤールからグレーバーへ／自治の固定観念をひっくり返す／生き延びるための「すきま」／バラバラで小さい店の自由で柔軟な「自治」／独立自営業という希望／あらたな政治/自治への想像力を持つこと

コラム①—「自治」の現場から「京都三条ラジオカフェ」がつなぐ縁 藤原辰史

## 第三章 <コモン>と<ケア>のミニユシパリズムへ 岸本聡子

「自治」とは暮らしの未来を考える行為／国政ではなく地方自治から始める意味／民営化の正体——国家と資本の癒着／<コモン>の管理から始まる「自治」／国家と資本を恐れないフィアレス・シティ／ミニユシパリズム——広がる市民の挑戦と自治体の連帯／政治のフェミニナイズーションと<ケア>の思想／<コモン>と<ケア>の両輪／地方自治から国政を揺るがす南米チリ／インソーシングで「命の経済」を耕す／インスティテューションを変えるのは市民／杉並区の児童館と住民の声／市民と歩くインスティテューションをつくる／上からでもなく、下からだけでもなく／少人数で「ここから」始める

コラム②—「自治」の現場から市民一人ひとりの神宮外苑再開発反対運動 斎藤幸平

## 第四章 武器としての市民科学を 木村あや

「自治」の種をまく市民科学／市民科学の先駆／脚光を浴びるシチズン・サイエンス／科学をオープンなものにする／市民科学が自治体を動かす／新自由主義とのジレンマ①——「科学の民営化」でいいのか？／新自由主義とのジレンマ②——「自己責任」論が強化されてしまう／科学主義とのジレンマ①——脱政治化の罨／科学主義とのジレンマ②——データ化できないものの周縁化／「つくられた無知」／データ・ポリティクス——データは誰のものなのか／争点隠しの手段に使われる可能性／市民か、それとも活動家か——境界線の引き方／データの公共性を大事にする／社会運動としての市民科学を／「リテラシー」と「データ」の意味を広くとらえる／「場」をつくる市民科学

## 第五章 精神医療とその周辺から「自治」を考える 松本卓也

息苦しい医療現場／日本の精神医療の抑圧的な過去／精神医療における「自治」とは何か／「六八年」の思想と反精神医学／東大闘争(東大紛争)と日本の精神医療改革運動／「反精神医学」のルーツ、イギリスでの実践／「ふつうの精神科医」の誕生——木村敏／「病棟を耕す」という静かな革命——中井久夫／異質な他者を歓待することによって自分自身

が変化する／ポスト反精神医学としてのラ・ポルド病院／「<言う>こと」を可能にする「自治」の場／反精神医学ではなく「半精神医学」——当事者研究／「ポスト六八年」の思想の実践としての「べてるの家」／「当事者になる」こと／「主体集団」がつくる「斜め」の関係／世界をましなものに組み換えるための<自治>

コラム③ー「自治」の現場から野宿者支援からのアントレプレナーシップ 斎藤幸平

## 第六章 食と農から始まる「自治」 藤原辰史

——権藤成卿自治論の批判の先に

「自治」の問題としての食と農／農村自治に魅了された柳田國男／斎藤仁の「自治村落論」／農本主義の引力／権藤成卿とは何者か／権藤成卿の理想——「社稷」共同体による農民の「自治」／権藤のアナキズム的な側面／平等を求めて——大化の改新と班田収授法の評価／暴力的な改革礼賛と昭和維新テロへの影響／軍国主義と農本主義／左派と権藤成卿／権藤の時代的批判力／リアリティの欠如がもたらした破綻／自己責任論の態度／有機農業の身体性／「自治」の原点は人間関係／食堂附属大学の試み

## 第七章 「自治」の力を耕す、<コモン>の現場 斎藤幸平

「自治」をめぐるふたつの困難／「構想」と「実行」の分離／資本による「魂の包摂」／貨幣がもたらした「自由」は自由なのか？／コスパ思考が民主主義の危機を深める／政治主義の罨／なぜ社会の保守化を止められないのか／権力の補完勢力に成り下がる社会運動／「上から」の改革に希望はない／「下から」の変革と「自治」の力／二〇世紀の限界——社会主義国家と福祉国家の共通点／二一世紀の新展開——水平的ネットワーク型の社会変革が始まった！／「生政治的生産」の力を使う／マルチチュードによる<コモン>型社会／ルールとリーダー不在の素朴政治？／リーダーと大衆の逆転／水平ではない「斜め」の関係を／現場の模索がミニシパリズムを生んだ／リーダーフルな運動を育てる／「他律的な社会」を乗り越える自己立法／「人新世」に必要な自己制限／絶えざる自律と他律の循環／他律的なアソシエーションを避けるために／「自治」におけるアントレプレナーシップ／経済の領域が変わると、政治が変わる／「自治」は<コモン>の再生に関与していく民主的なプロジェクト

おわりに——どろくさく、面倒で、ややこしい「自治」のために 松本卓也

(註)

- 1 「反障害通信」152号巻頭言「世界は変え得る、途はいくつも！」参照
- 2 全共闘運動の幾つかの機能的パターンを示し得ます①党派の運動のベクトル合成としての大衆運動②党派支配、もしくは党派連合支配の中での擬似的民衆運動③自然発生的な運動主導の民衆運動
- 3 「大衆運動」というのは党・党派の活動の展開としての活動で、自然発生的な運動は、民衆運動と表現されることではないかとわたしは押さえています。

たわしの読書メモ・・・ブログ 676

・斎藤幸平『マルクス解体 プロメテウスの夢とその先』講談社 2023

斎藤幸平さんの追っかけの続き。この本は「たわしの読書メモ・・・ブログ 634」／・斎藤幸

平『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』KADOKAWA (角川文庫ソフィア) 2022』で取り上げた本と同様に英語で書かれた本の翻訳本です。そして、内容的には、「たわしの読書メモ・ブログ 573 / 斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社 (集英社新書) 2020』で取り上げた本と「並行して準備していた2冊目の学術書」(「日本語版あとがき」377P)。原題は Marx in the Anthropocene: Towards the Idea of Degrowth Communism 「英語版のタイトルは日本語にすれば、『人新世のマルクス 脱成長コミュニズムの理念に向けて』である。」(「日本語版あとがき」377P)。これを『マルクス解体』と訳したのは、「マルクス葬送」を想起させる意図的な誤訳ではないかとわたしはとらえ返していました。

「意図的な誤訳」というのは、同じようなタイトルにすると新しい読者が見つけにくいということで、より多くの対話をしたいということで、「しかけた」というところで、内容的には、「それでも、マルクス主義の再生を望むなら、その際の必須条件は、いわゆる「史的唯物論」という「生産力」と「生産関係」の間の矛盾を進歩の原動力とする悪名高い歴史観に依拠するマルクス像を解体することではないか。」(「はじめに」9P) (註1)という、要するに古い「マルクス像」の解体(「日本語版あとがき」379P)で、内容的には「マルクスの再生」なのです。これは、古いマルクスが生産力主義になっているとか、マルクスは差別の問題をとらえられなかった、というような批判があるところで、それは、晩期マルクスが『資本論』の草稿を書きながら、自然科学の本を読み、古代社会ノートを取りながら、膨大なノートをメモリ、本への書き込みなどを読んでいくと、いくつかのキーワードとともに(「物質代謝」など)、一八六八年位をメルクマールとして(註2)晩期マルクスの転換と言われることをおさえられると著者は主張しています。

また、エンゲルスとマルクスの分業と言われていることのとらえ返しも必要になっているようです。マルクスが論的深化を進め、それをエンゲルスが解説をしていったということだけでなく、ここで問題になっているのは、自然科学的なことはエンゲルスの分担として、『反デューリング論』や『自然弁証法』がマルクス主義の自然科学的テーゼであると伝統的なマルクス主義で定式化されているのです。そもそも、『ドイツ・イデオロギー』においても、エンゲルスが先行的に草稿を書きマルクスがそれにコメントしていくというエンゲルスの先行説があり、経済学の必要性をエンゲルスがマルクスに提起したということがあり、自然科学においても、エンゲルスが百科全書的なところから先行して踏み入っていて、マルクスがそれを追従したということがあるという指摘があります。ですが、この自然科学ということにおいても、マルクスはその学習したことを本にしえていないにしても、膨大な草稿や書き込みを遺しているのです。いずれにしても、マルクスが深化したとらえ返しをしていったのです。ここで、問題になっているのは、「物質代謝」という概念です。著者は、エンゲルスは結局物質代謝ということをとらえ切れていないと批判しています。

エンゲルスがマルクス主義なるものを規定し、スターリンがマルクス・レーニン主義なるものを定式化していったのですが、そもそも、エンゲルスがマルクスの謂っていることを押さえ切れていないということは、他にもいくつかあると指摘しています。①マルクスは、西洋中心主義・植民地支配の正的側面(「野蛮の文明化」)の主張から脱したが、エンゲルスは脱しきれない②物質代謝の概念をエンゲルスはとらえ切れていなかった③マルクスは生産力(至上)主義、単線的発達概念から脱しようとしていたが、エンゲルスにはそ

れが見られない、④エンゲルスは自然科学を百科全書的に学習していたが、マルクスは物質代謝というところで、環境問題とからめて学習していた。エンゲルスは物質代謝という観点ではなく、「自然の復讐」というところで環境破壊ということをとらえ返していて、「科学的社会主義」の実現による、科学的技術の発達による解決というところで、環境問題をとらえかえしていた(註3)、という押さえになっています。「エンゲルスは、「合理主義」、「実証主義」、「進歩的歴史観」、「生産力主義」、「ヨーロッパ中心主義」といったマルクスの理論——とりわけ初期マルクスには濃厚であった(そして晩期マルクスが止揚しようとした)——近代主義的な側面を過剰に強調することになってしまったのである。」371P「エンゲルスの哲学的プロジェクトは、マルクスの後期の理論的試みと両立可能なものではなかったのである。だからこそ、マルクスとエンゲルスを区別することは、『資本論』を超えるために不可欠な条件なのである。」372Pと突きだしています。

その他、一元論ではなく、自然と社会との関係を押さえるには二元論的なとらえ返しが必要になるとかいうことを著者は展開し(「方法論的二元論」373P)、物化と物象化の概念の違いの押さえとか(註4)、そして、「この気候危機の時代に求められているのは、価値、物象化、階級、社会主義、エコロジーについてのマルクスの理論を否定することではなく、脱成長という立場からマルクス主義の遺産を徹底的に再解釈することではないだろうか。」374Pというまとめ的文を出しています。

更に、ここからは著者の論考とは少し乖離して、わたしの見解ですが、⑤エンゲルスは百科全書的というより、自然科学を弁証法の法則的とらえ返しとして展開して、その弁証法によって革命の必然性を主張しようとしていたのですが、マルクスには弁証法を法則としてとらえる観点は稀薄だったのではないのでしょうか、⑥エンゲルスは弁証法ということの定式化ということはあったにしても哲学の死を宣言していたけれど、マルクスは哲学的な探究に踏み入ることは止めていたけれど、『資本論』には物象化論という哲学的な軸が貫いているということ、エンゲルスには『資本論』が哲学書でもあるという観点、物象化論で貫かれている(註5)ということがとらえられていなかったのではないかと、と思えるのです。マルクスにも色んなブレのようなことはあったにしても、です。このことは、MEGAで出されてきているマルクス自身の手になる『資本論草稿集』とエンゲルス編集の『資本論』との違いということで対照化していけるのではないかと考えたりしていますが、わたしにその余力はありません。誰か若いひとたちにやってほしい課題です。

まだいくつかの指摘ができるでしょうか？

その他「構想と実行」という概念を突き出しています。そこで、それが切り離されることが肉体労働と精神労働の分離・分業という、分業が差別に繋がっていくことを指摘しています。このことは実は、わたしの世代、団塊の世代が経験した民衆的運動、全共闘運動の中で突き出された、決定と執行の一致ということ、きちんとはとらえ返した概念になっています。

さて、わたしは、斎藤さんの本を読みながら、ほぼ共鳴していて、論的深化を得られていると感謝もしているのですが、いくつか疑問に感じることがあります。

まず、斎藤理論のキー概念に、「脱成長のコミュニズム」ということがあるのですが、自分自身でも反問的な問いを立てられています。わたしは何か違和を感じていました。ア

ベノミクスということで、経済成長戦略という突き出しがあります。新自由主義的グローバル化の進行の中でそれが世界を覆った段階で、経済成長を求めていくと、それは「物質代謝の亀裂」とも言われる環境破壊や差別の拡大という事態になります。それへの批判としての「成長の罠」にはまった資本主義批判ということなのだと思います。ですが、そもそも、成長とはそもそも何かという問いが必要になります。そのことに丁度イメージが重なる論争があります。わたしは障害問題を軸に差別の問題を考えてきました。そういう中で、「発達保障論」という突き出しがあり、それへの批判としての「反発達論」という理論も出ていました。「発達保障論」というのは、「発達の弁証法」なる法則の物象化に陥ったひとたち(これはエンゲルスの弁証法の法則化とその物象化に通じるのです)が、「ひとは無限の発達の可能性を秘めている、それを保障し促すのが、周囲のものの役目だ」として、「障害者」に標準的人間像に近づくことを求めるといって、まさに、「障害者」に対する抑圧という差別の論理を押し付けたのです。そこで、それは抑圧だ、差別だということで、「反発達論」ということが出てきたのですが、そもそも、「発達」ということをその中味をきちんと押さえないで強要することを批判していて、「発達保障論」の「発達」概念を批判しているところから逸脱して、そもそも「発達」とは何かということからのとらえ返しにはなっていなかったのです。だから、「できる」ということへの反発ということまで起きていました。そのことからとらえ返せば、資本社会における「利潤の悪無限的追求」としての発達の批判と、その頸から脱したところで、そもそも何を求めるのかということが純粹に追求されることが、「成長かどうか」「発達かどうか」はどうでもいいことなのです。だから、コミュニズムが実現されたところで、「脱成長」という冠は必要でなくなるのではないのでしょうか？

もう一つは、この本には出て来ませんが、わたし自身がマルクスの物象化論を反差別論に援用しようという立場から、マルクスのもうひとつの転換、疎外論から物象化論へということの意味と意義を押さえ損なっているのではないかということです。これは『ドイツ・イデオロギー』の共同執筆の中で、一八四五年頃おきた転換としてマルクス／エンゲルスの初期から中期への転換です。実は斎藤さんは、この疎外論から物象化論への転換を認めていません。これは実は実体主義批判と差異論からのとらえ返しにキーとなることなのです。

実は、この本の中で、斎藤さんがローザ・ルクセンブルクの本源的蓄積論を資本主義がもたらす物質代謝の亀裂が資本主義が資本主義で在る限り逃れられないこととして援用していることと繋がっています。資本主義は恒に継続的本源蓄積を求めざるを得ない、そこで環境破壊が起きているというとらえ返しです。これは環境破壊(未来の世代の生きる環境の破壊という通時的収奪)もその一端ですが、差別というところで総体的に言えることなのです。総体的に言えば、差別なしには資本主義は継続し得ないというところで、この差異論の押さえに、疎外論では展開し得ず物象化論的押さえが必要になっています。だから、この転換の押さえも必要になります。

さて、もう一つわたしの問題意識でビビットしたことを書き添えておきます。わたしは反原発の運動に参画しているのですが、その中で、反原発に特化したところで、気候変動というところを批判した発言や文を出しているひとがいて、気候変動というのは虚偽であ

るところで、斎藤さんに質問状を出したけれど、返答がないという批判をしているひとがいました。そもそも論旨が紆余曲折しているし、論理的な論攷にはなっていないので、相手にしないとされたのかもしれませんが、そもそも学者のひとたちは、自分の出す本や論文提出の中で応答していくというスタイルで臨む傾向があり(註6)、まさに、その応答的文をこの本の中で見つけました。ちょっと長くなりますが引用しておきます。「大加速時代における二酸化炭素排出量の激増は、化石燃料に依拠した特定の社会的生産の編制方法と結びついた現象である。その結果温室ガスの排出が進み、地球の気温上昇がティッピング・ポイントを超えると、正のフィードバック効果によって不可逆的で急速な、予想外の変化が引き起こされる可能性がある。気候変動による南極氷床の融解により、氷に含まれるメタンガスが放出されたり、黒土が表出することで太陽光の熱吸収が進み、気候変動がますます加速する。また、海洋酸性化や森林伐採によって、一定の種の生物が減少・絶滅すると、食物連鎖が乱れ、他の種の減少にもつながる。これらの連鎖反応は、人間の活動が直接の原因ではないし、人間が変えることもできない。それゆえに「不可逆的」な自然の限界(バウタダリー)と考えられているのだ。」186P、実は別の文脈で出された文でわかりにくいのですので補足しますが、二酸化炭素の増加ということや気温上昇を過小評価するひとは、「連鎖反応」ということを押さえ損なっていることや、線形方程式的な因果論的などころで問題をとらえていることがあるのです。現実には、函数的連関態のなかで、錯分子構造——函数内函数や多次元的方程式のような中で、影響が極化することをとらえ損なっているのです。

この著は再読してもっと丁寧にメモをとり、対話を広め深めていく大切な著なのですが、先を急いでいます。目次だけでもここで起こし、皆さんに関心をもって貰いたいとも思うのですが、是非読んでほしい書だということを提起して、それもここではなさないままに、終えてしまいます。

(註)

1 「「生産力」と「生産関係」の間の矛盾を進歩の原動力」とありますが、これは「進歩の原動力」でなくて、社会主義革命の必然性として突き出されていたことで、「悪名高い歴史観」とは「唯物史観」のことを指すと思われませんが、問題は生産力至上主義であって、環境負荷のない生産力の発達まで否定することではない、資本主義で発達を求めるとほぼ「物質代謝の亀裂」になってしまうという話です。経済的なことがイデオロギー的なことを土台的に規定するというところまで否定できないのではないのでしょうか？

2 自然科学的にはフラスの学習 261P、マウラーなどの共同体研究やロシアの共同体兼ミールの研究、ロシアの活動家たちとの接触から、この一八六八年をメルクマールとしているようです。

3 科学の発達の中で解決しようという、科学主義的などころを、ギリシャ神話のプロメテウスの何ちなんで、プロメテウス主義という概念を著者は出しています。

4 ただし、区別がついていない面が出てきます。「最終的に人間さえもモノのように扱うようになる、この主体と客体の逆転を、マルクスは「物象化 *Versachlichung*」と批判したのだ。」144P——モノのように扱うのは物化ではないかと思えます。マルクスの物象化とい

う概念は、著者も引用していますが、「ひととひとの関係をモノとモノとの関係のようにとらえる」とか「社会的関係を自然的関係のようにとらえる」ということだとわたしは押さえています。主客図式については、そもそも青年ヘーゲル派内部の論争から、マルクスが確立した新しい世界観を押さえ直す必要があり、そのことで、疎外論から物象化論の転換が起きたのだと廣松さんは押さえています。

5 これは廣松渉さんと廣松シェーレのひとたちで作った廣松渉編・著『資本論を物象化論を視軸にして読む』岩波書店 1986 で展開されている内容ですが、マルクスがどこまで自覚的意識をもっていたかは明らかではありませんが、マルクスの中に哲学的なことは生涯生きていたのではないかと思っています。

そもそも齋藤さんが物象化論ということはどうとらえているのか、分からないところも出てきます。「実際、資本主義における労働が、今日の技術水準を考慮しても、「その人間的自然に最も値し、適切である条件で」実施されない最大の理由は、物象化にあるのだ。……だからこそ、物象化された事物の盲目的(ママ)な力による支配が続く限り、「物質代謝の亀裂」は「修復不可能」であり続ける。」356-7P ここの「物象化」ということは、「抑圧された関係性における生産力」という意味だろうと想うのですが、それは、マルクスが使っている物象化の概念（「人と人の関係がモノとモノの関係として現れるという「物象化」182P）とは違っているようにとらえられ、なぜ、「物象化」と何故表現しているのか分かりません。一般的な漢字的意味で「物象としてとらえる」というニュアンスになるのではというところで、実体主義的にとらえるという意味にもとらえられます。ならば、まさに廣松物象化論と通じる事になっています。ですが、そもそも齋藤さんは廣松物象化論批判をしているのです。

さて、ちょっと脱線しますが、この後に「ソ連や中国を見ればわかるように、いわゆる「社会主義」の持続可能性を自明視することは到底できない。」という文が出て来ます。括弧をつけていますが、そもそも、ロシアも中国も労農独裁的のところから党独裁に止まって、社会主義の定立に失敗して、国家資本主義になっています。それを社会主義であったかのようにとらえるところから混乱が起きてきているのだと思います。このあたりのとらえ返しがないとマルクス葬送の流れにのみこまれてしまうのではないのでしょうか？

6 わたしは障害学批判をやっていて、立命館大学大学院で生存学拠点を築いた立岩真也さんと対話していたのですが、彼は自分の出す本の中で、わたしの論攷を紹介して、それなりに応答してくれていました。それで、わたしは彼が新しい本を出すとそれを買って、わたしに対する応答がないか追っていくということをしていました。それも彼の死で潰えたのですが。合掌。

たわしの読書メモ・・ブログ 677

・立岩真也『人命の特別を言わず／言う』筑摩書房 2022

昨年7月末に亡くなった立岩さんの生前の自ら編集した最後の単行本(のよう)です。

ピーター・シンガーの話から始まり、それへの批判で終わっています。シンガーは人間中心主義を批判し、苦しみを感じる動物を殺して食べるべきではない、という一方で意識

のない「障害者」には安楽死を勧めるというとてもない論攷を出しています。それをずっと批判してきた立岩さんのまとめた本。生命倫理や社会倫理学というジャンルになるのですが、わたしは倫理学批判をしています。その倫理として立てられる問題がどういふ問題で、そこに抱えさせられている問題をどう解決していくのかを問題にしていくことで、倫理に落とし籠められることを批判してきたのです。

わたしは差別というところから問題をとらえ返してきました。シンガーの論はパーソン論として展開されてきていることで、能力や意識ということを物象化して、共同主観的にとらえられず、「能力」がその「個人」が持っているものとして、すなわち内自化してとらえられてしまっているのです。実際は、ひとは協働する「動物」で、能力ということは社会的に蓄積されて(言語も同様で)、それを皆が使っていく、今流行の言葉でいうと、コモンとしてとらえることが必要なのです。それが個人の能力としてとらえるのは、資本主義社会の活動が労働を軸にして立てられ(ひとの生きる営為が労働を軸に立てられ、私有財産制が定立しているところでは既にその矛盾にとらわれていくのですが)、その労働能力によって賃金が違ってくるといふその社会の特質から、ひとをその能力によって価値付けしていくという、資本主義社会の矛盾そのものなのです。シンガーもその資本主義社会の論理にとらわれているのです。

立岩さんは、市場原理はなくならないとして、社会の根底的変革の途を塞いだ論攷にしていっているのです。問題がどういふ問題でどう解決していくのか、行けるのかが出てきません。社会の根底的変革ということが出てこないのです。どういふ倫理を立てて差別を抑え込むのかというところに問題を収束させることから抜け出せないのです。

さて、この本の立岩節の対話的論攷は、さまざまところからのとらえ返しをしています。わたしが留目していたのは、吉本隆明論です。わたしは立岩さんとは逆に、吉本さんの「共同幻想」論を物象化論と通底することとして援用していますが、反差別ということではとても共鳴できないでいます。

さて、この本で、わたしの名が文献表にあり、註でわたしとの対話を載せてくれます。『自由の平等 簡単な別な姿の社会』岩波書店 2004 の再録です。「しばらく前に終止してしまったかのような諸思想については、それが何だったのか、どんな論理の構造になっていたのか、何を巡って対立したのか、再検討する必要があると思う(序章註 15)。(疎外論／物象化論という対立については廣松[1972][1981]等、田上[2000]等、他。なお本節と本書の何箇所かは立岩[1997]を論じた三村[2003]への応答でもある。) . . . . . / なお、私は「疎外論」に対置されるものが「物象化論」——それは本章ではあまり肯定的に紹介してこなかった範疇化と支配等々を結びつける議論(註 5・7、二四四頁)に似ている——であるとは、ずっと以前、大学生を始めた頃にはそんなことなのだろうかと思っていたこともあったが、その後は、考えていない。」 258P これは、「能力を個人がもつものとして考えない」といふ反差別論の核心のところでは、この物象化論は重要な概念です。

最後に、極めて短く、この本のエキスと言えことを切り抜いてメモります。

「たしかに人間に似たものが作られている。機会は、またソフトウェアはどこまでいったら人間になるのか。すると、それは殺してよいのかいけないのか。そうした主題にわたし自身はあまり興味はないが、そんな議論は既にたくさんあるはずだ。それを知っているわ

けではないが、そんなに難題なのだろうか。何が作られてはならないかについての答えを言えばよいだけだと思う。」237P・・・ヒトの種概念をゆるがすものは作ってはならない。

「人間のよう残念な存在はできるだけ作らないほうがよい。」238P・・・シニカルなペシミズム

「ずいぶん長いこと、いろいろと言われてきたはずにもかかわらず、障害を(なおす薬がたいへん廉価であったとしても)なおしたくないと関節拘縮症の障害をもつ(ママ)テイラーから言われてシンガーはまた驚いている。そんな人を説得しようという記にもなれない。自分で肉を食べないことにしている分には、それはまったくわるいことではないから、どうぞ、というだけだ。」239P・・・いらだちの中に怒りさえも感じる文。

### (編集後記)

◆月二の発刊続けています。前回、今後の発刊の見通しを出したのですが、また変更になりそうです。[廣松ノート]の『存在と意味』の「読書メモ」の一回分が余りにも多くなり、分割しないと(だぶん読者も)わたしも大変になっていて、一回分を減らそうという思いを懐き、月二を続けようかと思っています。ただ、正月の3日の発行はお休みします。2月からの話、「鬼が笑う」話ですが。

◆巻頭言は、「核というダモクレスの剣」を書きました。もともとは、権力の座の危うさ、その地位にある者の危うさの心境の意味ですが、核兵器、核発電が、民衆の頭の上に吊された剣であるということでの転用です。「責任」という概念からのとらえ返しです。

◆読書メモは、[廣松ノート]を一休み、色んな本の読書メモを載せました。故立岩さんの関係、山本義隆さんの本、斎藤幸平さん関係の本、ひさしぶりのバリエーションのある読書メモになりました。

◆前号でも書いたのですが、「インターネットへの投稿から」は、色んなあやうさの文にコメントで応答的投稿をしていたのですが、結局ここには掲載せず、今後、その内容は巻頭言などで書いていきます。

◆衆議院選挙の結果が出ました。議席的には変動があったのですが、どちらにしても保守の範囲内で、新しい右派政党が増え、どちらかという左派が衰退・頭打ち、政治改革統一推進暫定内閣という芽はあるのですが、それも実現しそうにありません。アメリカ大統領選挙が間近です。暗雲立ちこめています。

## 反障害－反差別研究会

### ■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞

い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

#### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害一反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>